

□ 書評 □

河本のぞみ・石川 誠(著)

夢にかけた男たち ある地域リハの軌跡

伊藤日出男

(青森県立保健医療大学開設準備室)

初めてこの本を手にする読者には、どこかのラグビーチームの物語かと思われるかも知れないが、本書は都市型の地域リハビリテーションを実践している高知市の医療法人近森会の人々を描いた12年間の記録である。著者は河本のぞみさんというOTの方と(マイムパフォーマーとしても国際的に活躍中)、石川誠・近森リハビリテーション病院長との共著となっているが、実際は河本さんのルポルタージュである。

序章では、高校、大学とラグーマンだった石川氏が、脳外科医からリハビリテーション医を目指した動機や、急性期から在宅まで本来のリハビリテーション医療を追求する近森病院の歴史を紹介している。第1章では、冒頭からリハビリテーションを標榜する病院の外来部門に対する手厳しい批判が現れる。退院した脳卒中患者に対する長期にわたる外来訓練に対して、よく聞く地域の受け皿がないからという言い訳は通用しないことが、本書を読むとよく分かる。

近森リハビリテーション病院ではPT25人、OT9人を擁し、病棟と連携しての徹底したADL訓練を主体としているという。この病棟配置というシステムは考えてみれば当たり前のことだが、何故これまで他の病院でもできなかったのか、ここに日本のリハビリ

テーション医療の未熟さが表れているように思う。外国ではよく見られるように、PT、OTが早朝から出勤して入院患者の離床や洗面、食事などの指導を担当してもおかしくないし、それによって看護や介護職との文字通りの連携の場とすることもできると思う。

随所に刺激的な表現もある。例えば、ボバース法などの治療技術追求に終始し、少しもADLに貢献してこなかったPTに対する批判(第3章)、あるいは「維持期」という言葉に対する河本さんの異議申し立て(第6章)などである。これは長い間医療面を主体に教育を行い、保健や福祉領域には関心を向けてこなかったPT、OT教育に対する痛烈な批判とも受け取れる。

本書の中心は第4章の「リハビリテーション・システム」である。ここでは従来の殻を破る2つの実践過程が詳述されている。1つは急性期から在宅を支える連携システムを確立するに至る過程であり、他はリハビリテーション・スタッフの病棟配置や記録類の一元化などによるチームワークの成功の過程である。読んで迫力のある内容であった。

本書は学術的な専門書ではない(それ程高価でもない)が、内容が面白いので一気に読み終えることができる。しかし、単に「ある地域リハの軌跡」として読むだけでなく、日本のリハビリテーション医療のあり方に対する問題提起の書として読むべきであろう。その意味で、本書を地域リハビリテーションの実践家だけでなく、特にPT、OT教育に従事する方々や、リハビリテーション専門医の方々にぜひ読んでいただきたいと思う。

(B5 頁196 定価(本体2,000円+税) 1997 三輪書店・刊)